

猿

宮本百合子

青空文庫

人物

ヨハネス

(十八歳)

エツダ

(十六歳)

エツダの母親

(四十歳前後)

場所

デンマークの片田舎

時

或る秋

幕開く

第一 エツダの家の中

下手に、大きな鉄の蝶番ちようつがいの付いた木の大扉、開け放してあり、傍の壁の三段の棚の上には、上部に大小の皿、下段には、罐、硝子瓶その他、料理用の小道具が置いてある。

直ぐ前が、石塊で囲んだ炉、鋸齒のような自在鍵から、円い煮物鍋が下っている。

椅子、薪木入等。

上手には、頑丈な、手彫模様のついた木製の長卓子、腰掛、チエスト櫃等置かれている。

正面の素朴な硝子窓から、透明な黄昏の光が部屋に入り、横顔を浮上らせながら、エツダ、白い後までまわる大前掛けをし、くると髪を包む頭巾をかぶって、糸車を廻している。母親、チロチロと小さい焰の見える炉辺で、

縫物をする。暫く沈黙。――

やがて、

エツダ

阿母さん！

母親 何だい？（縫物の手を動かしたまま）

エツダ ヨハンがおそいね。……どうしたんだろう。

母親 ——あの子のことだから、また、野っ原に仰向いて、雲でも見ながら、腹の空^すくの^すを忘れて^すいるんだろう。——大丈夫だよ。
エツダ ……（糸車の音が、四^{あたり}辺に響く）だってもね、阿母さん。
ヨハンはきつとどうかして^すいてよ、私が、ちゃんとこの胸で感じるんだもの。

母親 （笑い）お前の胸かえ？ 要心おしよ、小さい娘っ子の胸と——

エツダ （強く）厭なの！ そうじゃないさ。ヨハンは、死んだあの子のお父さんやお母さんを、このごろ頻りに思い出している

つて云うのよ。

母親（しんみりと）そうかえ？ そんな風かえ？——可愛そうにね。……然し、思い出すに種もなかうよ。何しろ、生れてたつた五十日目に、死なれてしまったんだもの。

エツダ それあ、あの子は自分で何も覚えてはいないわ。でも、他人が云うんだもの——ヨハンが、自分が孤児^{みなしご}で、阿母さん阿父さんがほんとの親でないのを知ったのだって、ハンスの婆さんに聞いたからよ。——（声を潜め）あの子の阿父さんが、狂って死んだってほんと？ 阿母さんを捕まえて、泣いて逃げるのを、むりやり河へ突陥^{つっぱ}めたって……ほんと？

母親（身震いをし）止めておくれ。厭な話だ。——けれどもほ

んとはほんとだよ。阿父さんも、阿母んも、私達二人の若い時つからの友達で、一緒に踊ったり、氷の上を滑ったり……。楽しい思いをしてあっているうちに、かあさんは、お前の阿父さんと、一緒になあり彼方あも彼方で家を持あった——よく酒を飲うむ謡うたの上手な男だつあけが。——恐ろしい恐ろしい。鬼が憑ついたんだよ。

エツダ ヨハンは、誰からか、きつとそんなことでも聞いたのよ。
だから。

母親 （ふと、戸外に耳をそ欹ばて） しっ！（指を立ててエツダに合あ図あをする。さりげない調子で）もういい加減に休んだらいいじゃあないか？ エツダ。

エツダ ああ。

ところへ、ヨハネス、木履のような靴をはき、薄緑色の布の帽子、粗毛織の仕事着の装い下手の扉^{ドア}から現れる。

神経質そうな、細そりとした若者。

母親　ヨハンかえ？

ヨハネス　ああ。ただいま。

エツダ　（糸車を片よせつつ、振返り、元気に）お帰り！　どこに迷子なっていたの？

ヨハネス　（微笑み、エツダの丸い体の動くのを見ながら）戸外^{そと}の風は、さっぱりするからね。

母親　（これも縫物をしまいながら）もうやがて、嚏^{くしゃみ}の出そうな時節じゃあないか。雲を見るのも、夏だけにおしよ。……それは

そうと、どんな塩梅だったね？ ああ、あの渦は……。

ヨハネス ああ、あれの心配ならもう入用ないよ。すつかりぴんぴんして、他の羊どもと大巫山戯ふざけをやっていたもの。

母親 （棚から皿小鉢をおろしながら）よかったね。私は阿父さんの留守の間に一匹でも子供等に死なれちやあ堪らないと思ったからね。（火をほげたり、鍋を掻き廻したりする）

ヨハネス、エツダの傍に行き、

ヨハネス 阿父さんは今日も帰らないの？

エツダ もう二晩泊るんだって。——町から来た人が阿父さんの言伝てを持って来たわ。

ヨハネス 今度の市には、俺わしも行つて見たいな。——エツダ、一

緒に行かないか？

エツダ どうするの？

ヨハネス 賑やかな市街まちの様子を一緒に見るの——何か買つてあげるよ。

エツダ 詰らないわ。阿父さんは、町の女や男は、それは、それは、小ぎつぱりとしているんだって云つてよ。もう種いろん々な物を一杯飾った店ばかりなんだって。——そんなところへ行つて、たつた一本飾紐リボン位買ったって——それに、着物もありやあしないわよ。ヨハネス 衣裳なんぞは、俺もないけれど——綺麗なところを一緒に見るのはいいじゃあないか、皆俺たちの物ばかりだと想えばいい。

エツダ （おかしがって） ははははは、 たった一クローネで？

はははは阿母さん！ ヨハンたら、 たった一クローネで、 市中の物を買い占めるんだって！

母親 （美味^{うま}そうに湯気の立つスープを鉢によそい） さあさあエツダ。 ヨハンは原っぱで腹を空かして来たんだよ、 喋って許りいず——。

エツダ、 ヨハネスと顔を見合わせ、 忍笑い、 肩を竦^{すば}めてチロリと舌を出し、 母親のところへ駆けつける。 鉢を受取り、 長卓^{テーブル}子の上に置き、

エツダ さあ、 お殿様！ 御飯を召上って下さい。

ヨハン、 楽しそうに卓子につく。 エツダ、 駆けて棚から

パンやその他二三の食物を運んで来、ヨハネスと向い合
つて、卓子の上に両腕をかけ坐る。ヨハネスの食べるの
を頭を曲げ息をつめて見守り、一匙さじが終ると、意気込
んで訊く。

エツダ どう？ 美味しくなくつて？

ヨハネス まるで御馳走だね。どうしたの？

エツダ （唾をのむようにし）美味しいでしょう？ 今日ね、

昼からすっかり砂糖煮を拵えたの、その余だわ。

（一寸母の方を偷見ぬすみみ、悪戯いたづららしく囁く）私、林檎りんごのスープが

大好きでしょう？ 阿母さんは儉約家しまりやだから、ちつとでも傷のな

いのは、皆丸煮にするって云うのよ。仕様がなから、私、そう

つと地べたにおつことしたり、噛みついたりして、駄目を出したの。お蔭で、お前までこんなスープにありつけたんだわ。

ヨハネス 有難うよ。

空腹と見え、ヨハネスせっせと物を食べる。エツダ感服して眺め、やがてさも大発見をしたように、大きな声で、
エツダ ヨハン！ まあ、どうしてお前、そんな猿みたいな顔をするの？

ヨハネス （首を擡げ、口の辺を拭き） 何が？

エツダ パンを食べる時さ。なぜそんな猿みたいな顔をするの？

ヨハネス ほんとかえ？

エツダ （力を入れて頷き） ほんとだとも！ まあ、私ちつとも

今まで知らなかったわ。

ヨハネス（照れ）いそいで食ったから――。

エツダ（俄に好奇心で熱くなり）ね、ヨハン、もう一口食べて御覧よ。ね、ゆっくり。私こうやって見てみるわ。

ヨハネス、少し赧い顔をし、工合悪そうに、ゆっくりパ
ンの一切れを食べる。

エツダ（熱心に見守り）ほら！ ほら、ほら！ まるで、本も
のよ、ヨハン。まあ、お前ツたら！

母親 何だえ？ 大騒ぎをして――

エツダ（得意げに）ヨハンが猿なのよ。

母親 馬鹿！ お前の頭の螺旋ねじがゆるんだんだろう、しっかりお

し。

エツダ そうじゃあないわ。だって、ほんとにそうなんだもの。

ヨハネス （機嫌わるく）光線ひかりのせいだよ、エツダ。

エツダ （熱中し）いいえ！ こっちから見たって、矢張り同じよ。（場所を更えて、なお見守る）

ヨハネス （神経質になり、顔を平手で撫で廻し）お前のように、ふつくらしていないからそう見えるんだよ。

エツダ （ヨハネスが真面目なので、不意となぶ蹴る氣になる）瘡やせつぽちだって、猿と人間とは異うわよ。

ヨハネス （もう飲むことも、食うことも出来なくなり）エツダ！ 止めてくれ（悲しそうに）俺は——……お前の好きなほど美

い男じゃあないが——まさか猿じゃないよ。俺の阿父^{おやじ}だつて俺を生んでくれた阿母^{おつか}だつて。

エツダ

（笑い、小娘らしい意地悪さで）なあに？

ヨハネス

^{れっき}歴とした村の衆だ。

エツダ

そう？ お前偉いのね。見たこともない親のことが判る

の？

母親 エツダ。下らない口論はおやめ、人間が猿で堪るものか。

エツダ 猿が人間じゃあ、なお堪らない！

ヨハネス （決然と）お前が何と云つたつて、俺が猿でないこと

はわかつてるよ。見な。手だつてお前のほど白くこそないが、同じ形だ。足だつて、ほら。第一言葉が通じるじゃないか。

エツダ （負けず）それは、お前だけが、そう思っているんじゃないの？ 誰の眼で見ている？ 「お前の眼」じゃないの？

誰の耳で聴いているの？ 「お前の耳」じゃなくなつて。お前の眼が私の眼と同じだっていうのは、ただ、お前だけがそう思う、というばかりよ。お前の頭が狂つていないって。

母親 エツダ。云うことをお考え！

エツダ （はつとする。が、強いて勢いよく）ほんとにそうじゃないの？ お前が見て、これに間違いはないと思う世界の様子だつて、どこまで真実か解りやあしないわ。逆に立つたつて、お前は、お前の頭でほか、見るも考えるも出来やしないんだもの。ヨハネス —— （不安を面に漲し、凝つとエツダの顔を見る）——

—エツダ……エツダ——お前は（深い感情を以て）エツダに違いないだろう？

エツダ（笑い）知らなくってよ！ お前が自分を猿じゃあないと思ひ込むと同じに、まるで異ったどこかの婆ちゃんを、エツダだと思っているのかもしれないわ。

ヨハネス（混乱した顔になり）ああエツダ。（焦々しく）はつきりしてくれ。ね（エツダの手を執ろうとする）お前はエツダだよ。ね、俺が、死んだ親父の息子のヨハネスの通りに。ね。

エツダ（いよいよ笑い）お猿さん！ 人の真似する瘦猿さん！

ヨハネス、さつと立ち上る。エツダ面白そうな声をあげ、逃げようとする。ヨハネス突立ったまま、堪えられない

ように低く呻き、髪を掴み、いきなり顔中を動して、ほんとに獣のような相貌をする。

エツダ

（中腰になったまま）あら！

ヨハネス、いきなり体中の力を入れて、エツダを捕まえようとする。エツダ怖れ、叫び、飛ぶように、扉^{ドア}の方から室外へ逃げる。母親、驚いて椅子から立ち、扉の方とヨハネスとを見、

母親 どうしたんだい一体。何をしたの？

ヨハネス、黙って突立ち、眼をしばたたき、まるで絶望したように、くしゃくしゃ顔を歪める。幕。

第二　その夜、ヨハネスの部屋

上手に小さい窓。下手には入口、低い寝台。正面に衣裳箱、上に四角な鏡を立てかけ、燭台、聖書、櫛等置いてある。中央には机、椅子。洋燈ランプの黄色い光りが机の前に坐ったヨハネスの影法師を大きく後の壁に投げている。ヨハネス、頬杖を突き、考えに沈んでいる。幾ら考えても解らない風。髪の中に指をくぐらせ左手で襯衣シャツの襟元を烈しく寛めるゆる、顔には、深い、深い懷疑と苦悶が現れる。唇をきつと緊め、立ち、鏡を洋燈のところへ持つて来る。腰をかけ、燈の蕊しんをあげ、両手で鏡をつかまえて、

睨むようにその面を見る。泣くような呻き声。

「エツダ！」

鏡をすて、部屋中を重く歩き廻る。

どうにかして、この考えを振り棄てたいというように、時々立ち止つては柱に頭を押しつけ、壁に倚りかかる。

が、苦しさは増し、やがて、どうにでもなれ！ という

風に洋燈を吹消してしまふ。真暗闇の中で靴を脱ぐ音、

寢床の掛布を動す音。ひっそりとする。やがて、苦しげ

な寝返りの氣勢けはい。吐息。沈黙。いきなり、ひどい勢いで

ヨハネス寢床から飛び起る。素足でひたひたと床を踏み、衣裳箱の上の燭台に灯をつける。そして、蠟燭を引よせ、

涙の跡のついた顔を鏡に写す。暗い鏡の面で、揺れる灯かげを受けた片影の顔が、不気味に見える。ヨハネス、緊張に堪えないように、わざと顔を動す。眉を動し唇を歪め、突然、

「あッ！」

鏡の中に、はつきり人間と猿の混血児のような動物の顔が見える。脅かされ、後じさり、息も塞^{つま}って、

「猿！……猿！」

目も離さずに見るうちに、鏡面の動物の顔は、だんだん大きくなり、活々とし笑うように震えながら、鏡の中から抜け出して来る、ヨハネス、一步、一步と後退りなが

ら、

「何だ！ 貴様は、何だ！」

一切構わずその動物の顔は、刻々、延び、拡がり、迫つて来る。ヨハネス、狂ったように扉の方に走^かけつける。開かず。窓の方に走りよる。動かず、

「ああ！ ああ！ エッダ！」

両手を投げあげ、氣絶して床に倒れる。震えつつ、しばみつつ、奇怪な大きな顔は消え失せる——静かな、小さい蠟燭の瞬。——幕。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二卷」新日本出版社

1979（昭和54）年6月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第二卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年1月7日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

猿

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>